

教科でキャリア教育

戸畑高校（福岡・県立）

第49回
家庭科



今号の先生

家庭科 加藤敦子先生

大学卒業後、高校教員に。10年目の時に勤務しながら大学院に2年間通い、家庭科教育学の知見を深める。修士論文のテーマは「課題研究の指導法」。家庭クラブの活動(有志の生徒による家庭科の知見を使った課題解決)にも注力し、現任校ではその活動の一環で、生徒とフードロス削減に取り組み、農林水産省の表彰も受けた。

どんな人生を歩んでも、楽しめるように、 多角的な視点と家庭生活への自信を育む

大学生になったら、
一人暮らしすべきだろうか

福岡県立戸畑高校の加藤敦子先生は、家庭生活のことをいろいろな切り口から考える家庭科の授業を行っている。例えば、A・L・Tの先生がメインの進行を務め、英語でやり取りしながら「国や時代による住まいの違い」を比較する授業(上の写真)。今後を見越して、「一人暮らしの住まいの選び方のポイント」を考える授業。そして、「大学生は一人暮らしをすべきである」というテーマで、生徒が賛成・反対に分かれてディベートをする授業などだ。

ディベートの授業は、原則3人1組のグループを進める。まず行うのは、3人の中で「賛成側から論じる人」「反対側から論じる人」「議論を審判する人」の3役を割り振ることだ。次いで、賛成と反対の立場の生徒が120秒で立論準備する。

ディベート開始。大学生は一人暮らしすべきかを、次の流れで討論していく。

- ① 賛成側の立論(60秒)
- ② 反対側の立論(60秒)
- ③ 賛成側反論(相手の意見への反論60秒)
- ④ 反対側反論(相手の意見への反論60秒)
- ⑤ 補足討論(言い足りないことを伝え合う)

審判役の生徒は、こうした討論に耳を傾けたうえで、どちらに説得力があったかを判定。判定を下した理由も説明する。ここまでが1ターンで、続いて、賛成側だった生徒が席を立つなど、1人だけ別グループに移動。組む人を入れ替え、各自が先ほどとは違う役になり、またディベートを

する。これを3ターン行う。つまり、生徒全員が最終的に「賛成」「反対」「審判」の立場すべてを経験するのだ。

持論を戦わせるのでなく、あくまでも役に沿って意見を出し合うゲームなので、生徒たちはリラックスして討論していた。とはいえ、やるからには勝ちたいので、賛成・反対どちらの役をやるときも、説得力ある意見を出そうと、その立場になりきって頭をひねっていた。

具体的にはどんな意見が出たのか。

一人暮らし賛成側の主な意見は…
「自炊やお金の管理とかで成長できる。社会人になるための準備になると思う」

「親の偉大さがわかって感謝もできるし」「便利な場所を選んで住めるのも大きい。大学が近いか、スーパーが近いか」

「帰りに時間とかを気にせず、やりたいことに集中できるし、自由がいい」

「好きな人を家に呼べる！ これでしょ」
対して、一人暮らし反対側の主張は…

「自宅から通ったほうがお金がかからず、貯金できるし、親の助けにもなる」

「一人暮らしだと栄養が偏りやすい」
「病気やトラブルのときに一人だと困る」

「ゴミブリが出たら、一人じゃ倒せない」
相手の意見への反論として出たのは…

「自炊やお金の管理は、自宅通いでもできるよね？ 家事ならもうやってるし」

「社会人の準備は社会人になるときにすればいいし、大学生の身分は学業でしょ」

「自宅通いで貯金するより、一人暮らしで節約貯金したほうが、お金に強くなる」

「一人で困ったときこそ友達を呼ぼうよ」



「賛成側が勝ったと思う人!」と加藤先生が呼びかけ、そらだと思った審判役の生徒が挙手する。判定を受けてガッツポーズしたり、「よっしゃー!」と叫んだり、生徒たちは頭をひねるディベートを存分に楽しんでいた。



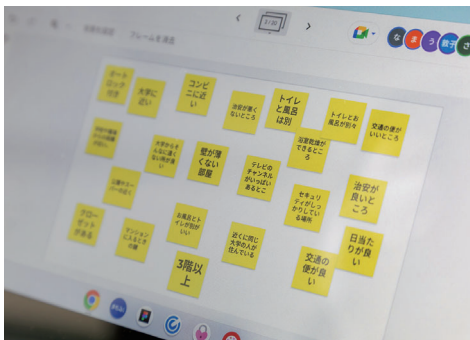
賛成も反対も経験するディベート。回ごとに自分の役にあった主張を考え、ワークシートに書き込み、相手側の意見もメモする。

ある人生を賛否両面で捉え 自分の視野を広げていく

こうしたディベートを、生徒たちは今までに「人は結婚すべきである」「選択的夫婦別姓制度を導入すべきである」というテーマでも行ってきた。加藤先生はその取組のなかで「生徒が物事を多角的に捉えていく」ことを目指しているという。

「例えば生徒のなかには、自分の親のように『結婚する』のが当たり前と感じている子もいます。『結婚しない』という生き方はまだうまく想像できず、それだけにもし自分が将来結婚しなかったら、すごく戸惑ってしまう恐れがあります。そうした生徒たちが『結婚すべきに反対』の立場にも立つてみて、結婚しないメリットまで考えることで、初めて『こういう生き方もある』と捉えていけると思っています」

夫婦別姓にしても、賛成・反対のどちら側にも立って主張してみることで、それぞ



一人暮らしの部屋選びのポイントを、皆で出した取組。加藤先生は情報科の免許ももっていて、ICTの活用も適宜進めている。



住まいに関する学術的研究から、一人暮らしの初期費用といった実務面まで、加藤先生がレクチャー。生徒は興味津々だった。



英語以外の教科の授業を、英語で進める英語イメージ教育。学校全体で推進していて、加藤先生も手応えを感じている。

れの立場への理解が進んでいく。「自分と異なる意見や価値観をもつ人のことを尊重できるようにすること。そのうえで、自分の意見はしっかりと伝えられるようになること。そして、どんな生き方にもメリット・デメリットがあることを知り、自分や他人のいろいろな生き方を受けとめていける度量をもつこと。そうした学びをもたらせたらと思っています」

進路のことだけでなく 生活の理想も思い描こう

一方、年間の授業では今後の生活を思い描いて「逆算して行動する」ことも促している。「2年後までに健康的で快適な一人暮らしができるようになる」という目標を示し、そのために調理実習で自炊の腕を磨き、住まい選びの目も鍛える、というように。「結婚したいなら、いつごろまでにどうやって相手を見つけて、どう仲を深める?」と問いかけ、関係構築のプロセス

にも目を向けさせ、授業でも人をデートに誘うゲームをやってみる、というように。「学校では、進学や就職といった『進路』の話はよくして生徒にも考えるよう促しますが、衣食住や結婚といった『生活』の話はあまりしません。本来、この2つは人生を歩むときの両輪であって、どちらも思い描くことが大事だと思います。そして『こんな生活をしたい』とイメージしたなら、そこに向かって行動を起こせる人にもなってほしいんですよ」

行動してもうまくいくとは限らないが、何もしないよりは動いた結果のほうが納得がいく。なわかつ、「どんな生き方にも良し悪しがある」という視点が育まれていれば、思い通りにならない面があっても、その人生を楽しんでいけそう。

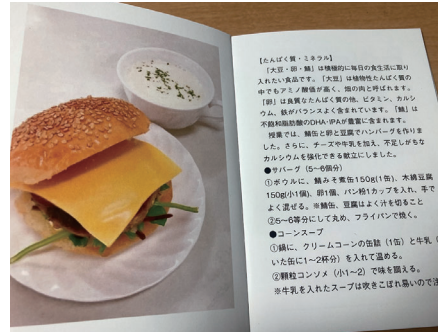
「どんな道を歩むかわからないけれど、その道であなただけであなただけに輝けるようになってほしい。生徒たちにはいつもそうした思いを抱いています」

授業ができるまで

家庭科への情熱はあったが 教員としての自信はなかった

「今日、家庭科があるのが楽しみ！」と、生徒が思うような授業をしたい。初任の頃から加藤先生はそこを目指してきた。自身が高校生のとき、「学校の授業がつらい」と感じることもあり、でも生活と結びつく家庭科は楽しめた。大学で家政科をさらに学んだら「枕元に教科書を置いて眠るほど没頭。そんな家庭科の魅力を、生徒たちに届けたいからだ。」

教員になったあと、仲の良い友人がなにげなく発した言葉も頭に残っている。「かわいそう、家庭科の授業じゃみんな聞かんやろう、と言ったんです。進学を目指す高校生からすれば、受験科目じゃない家庭科はそういう扱いになることもあるだ



調理実習は年10回以上実施。写真は鯖缶と豆腐を使ったハンバーガーのレシピ。加藤先生のオリジナルだ。



ディベートに向けての立論準備。テーマに沿って、さまざまな生き方のことを賛否両面から生徒一人ひとりが考える。

ろうな、と思いました。面白いのにもったいない、聞かなきゃ損と思わせる授業をしよう、と気合が入りました」

ただ、自分の力量には自信がなかった。「とにかくあがり症なんです。家庭科も生徒のことも大好きなのですが、教員としての適性はあまりないと思っています」

初任校では、引き出しの少なさも痛感。少しでも自信をつけようと、「家庭科に関する資格を1年に1個取る」と決めて続けてきた。カラーコーディネーター、整理収納アドバイザー、菓子検定、金融リテラシー検定…。学びながら「授業に生かせる要素を発掘する」のが楽しくなった。

30代前半には働きながら大学院にも通った。授業実践をブログに記録し、自身で振り返ることも10年近く続けている。

こうした取組を重ねることで、加藤先生は、自分なりのアンテナを立てて、幅広い家庭科の情報をキャッチできるようになり、それを基に授業を磨いていった。

トラブルを糧にして 教え子から刺激も受けて

目の前の困難を乗り越えるうちに確立できたスタイルもある。「50分間で料理を作って食べて後片付けまでする」という調理実習だ。前任校に勤務していたとき、2コマの調理実習を全クラス分は確保できない年度があり、苦肉の策として始めた。すると、1コマなら実習の回数を増やすことができ、回を重ねるほど生徒が調理への自信を深めていったのだ。

「生徒たちは小中学校の家庭科で、調理の基礎を学んでいます。その前提のもとに、私の授業では無洗米やだしパックなどに、私の授業では無洗米やだしパックなど調理を簡易化できるものも使い、『おいしいものを簡単に作る』ことを生徒が体験します。それこそ『これなら毎日自炊できる』と思えるように。家庭科で学んだことを、生徒たちがダイレクトに生活に生かせるようにしたいと思っています」

前任校では思い切った授業にもチャレンジした。デートから結婚、子育てまでを生徒が疑似体験する授業だ。相手を見つけて二人一組になった生徒や、あえてシングル道の選んだ生徒に「あなたの子よ」と生卵を渡す。その卵を2週間守りきれるか、各自挑むところまでやった。

この授業を鮮烈に覚えていた教え子が、10年後、その思い出をSNSにつづった。すると大反響となり、加藤先生にも一報をくれたという。彼女はSNSで、当時の授業をこのようにも言い表していた。

「私が先生の授業を今でも覚えているのは、私たちが自分の好きなように受け取ってよい授業をしてくれたからだと思う。そして私は大人から寄せられる信頼の喜びを知った、幸せな子どもだったのだ」

その言葉に、誰よりも背中を押されたのが加藤先生だった。昨年より、また新たな挑戦を始める。生活のことを生徒が自分たちで考えるディベートの授業だ。

INTERVIEW・教科を超えたつながり

選択することや 表現することを大事にして

私の担当教科の数学では、問題の解き方がいろいろあることは示しますが、基本、答えは一つです。加藤先生は家庭科で、絶対的な答えのないものごとについて生徒が「自分で選択する」機会をたくさん作られています。その学びは実生活にもすぐ生きると思うんですね。教科は違って共通する部分だと感じるのは、「自分の考えを整理して相手に伝える」のを重視されていることです。数学の授業でも、生徒が考えたことを口に出して説明する時間を大事にしています。



数学 百瀬 博先生

心身の健康を保ちながら 見通しをもって動けるように

加藤先生は、手軽に作れる料理や、災害に備える非常食、部屋選びのポイントなど、実生活や健康に役立つ取組をたくさんされています。私の担当教科の保健でも、生徒が「心と体の健康」について学ぶので、とても参考になるんです。「先のことを見通し、今何をすべきか考えて取り組む」よう促しているのも共通点かもしれません。体育の授業では、生徒が課題に取り組む際に、その先にどうなりたいかをイメージしながら今何をすべきか考え実践していくことを目指しています。



保健体育 中山伊織先生

戸畑高校(福岡・県立)



School Data

創立1936年/普通科
生徒数711人(男子330人/女子381人)
進路状況(2024年3月卒業)
大学192人、短大1人、専門学校等5人、就職1人、その他19人

Outline

校訓は「自主・調和」。勉学を柱に据えつつ、生徒自らが企画・運営する文化祭や体育大会といった生徒会行事、および部活動も盛ん。各教科の授業を英語で進め、知識活用や英語力向上を目指す英語イメージング教育も推進。

生徒はこう変わる

日々の生活から 人生を楽しむように

ディベートの授業に対しては、生徒たちから次のような感想が寄せられている。

「一人暮らしをしたが、そこへの反対意見も考えていったら、不安が生じた。自立の準備をしようと思った」

「自分とは違う意見が聞けて面白かった。反対意見を考えるのは難しかったけど、友達の意見を聞くと両方納得がいった。考

えの幅が広がった気がして嬉しい」

「さまざまな立場の視点から意見を考えるのが楽しく、討論で考えも深まった」

また、1年間家庭科を学び終えた感想としては次のような声が多く見られた。

「調理実習を12回もできて達成感があった。今後も自分で料理をしてみたい」

「生きていく中で知っていたほうがいいことがたくさん詰まった授業だった」

教え子の中には家庭科の先生になった者も結構いるそう、それも学問の魅力が伝わった一つの証だろう。加藤先生は、

そのほかの進路に向かう者も含めて、生徒たちに年度の終わりにこんなメッセージ

も届けている。

「この先の進学や就職では、望みどおりにいくこともあれば、想定外の結果になることもあると思うけれど、いずれの場合も、そこに家庭生活は必ずついてくるんですね。『進路』という側面だけを見れば、自分の力だけではなかなか思いどおりにならないこともあるかもしれませんが、『生活』というはある程度自分でコントロールできる

から、今まで学んだことも生かして、日々の生活から楽しんでいくください。そこを楽しめるようになれば、人生の3分の1ぐらいは約束されたようなものだと思いますか？」

食生活や住まいのことから お金や恋愛のことまで学んでいます

—印象に残っている加藤先生の授業を教えてくださいませんか？

黒木さん ディベートの授業です。いろいろな人の意見を聞くことができ、自分にはなかった考え方にもふれることができ、面白かったです。

税所さん 調理実習が印象に残っています。2時間じゃなくて1時間の実習で、10回以上やるんですよ。簡単に作れるレシピなので、家でも応用しながら作っています。

錦織さん 将来設計やお金のことを考えるすごろくゲームです。借金しちゃったり、子どもが大学にいくと家計が乏しくなったり、結構リアルでした。

中村さん デートゲームです。1週間を想定し、教室にいる誰かに「この日は空いてる？」とデートを申し込み、予定を合わせた7人と趣味とかの話をするんです。

小山田さん 実習ではない普段の授業も、一人暮らしのことを考えたり、家族のことを考えたり、どう生活していったらいいかをみんなで考えるのが楽しかったです。

—授業で学んだことで、将来に役立つと思ったことはありますか？

黒木さん 住居の授業で、マンションやアパートに住むなら部屋の位置は内側のほうがいいと言われていたのを先生が解説してくれて、将来役立つと思いました。

税所さん 部屋の位置もそうですし、部屋を借りるときの礼金や敷金の仕組みもよくわかっていなかったのが、一人暮らしをしたい私にはすごく勉強になりました。

小山田さん すごろくゲームでは、病気や事故、学費にかかるお金や、人生への影響も考えて。保険やローンのことも含めて、お金の使い道を考えるようになりました。

錦織さん 消費者関連の授業で、だましの手口を体感したとき、自分は引かかってしまったんです(笑)。見たことない手口だったので気をつけようと思いました。

中村さん デートゲームではDVのことも一緒に学んで。注意したいと思いましたし、男性の被害者もいるそうなので、抱え込まないようにしようと思いました。



左より、中村嘉月さん、小山田弥勲さん、税所志織さん、黒木結奈さん、錦織春穂さん

授業作りのポイント



- ・健康的で快適な暮らしを自分で実現していくための知識と技術を身につけてほしいです。
- ・進路だけでなく、生活についても何をどうしたいか思い描き、いろいろな選択肢のメリット・デメリットを理解して視野を広げ、どんな人生を歩んでも、楽しめるようになってほしいと思っています。

Point.1 /

学問としての 家庭科を発信

一人暮らしの部屋の選び方や、結婚の意識の変化について解説するときは、「住居学」「家族関係学」など専門的な見聞も紹介。家庭生活を科学的に読み解く面白さにもふれ、生徒の好奇心がより高まるように働きかけている。

Point.2 /

生活で役立つ レベルに

調理実習は年10回以上行い、裁縫では7コマを使って吾妻袋やクロスステッチに挑戦。生徒が上達を実感できるように、授業だけで終わりにならない、実生活の中で使える知識や技術のレベルまで高めようとしている。

Point.3 /

難しくても 面白い授業に

ディベートなどの授業への感想には「難しいけど面白い」という声も多く、それこそが加藤先生の目指す楽しい授業の形でもある。人生は選択の連続で、一筋縄ではいかないが、そこを一緒に楽しく考えていきたいからだ。

Point.4 /

授業の実践を まとめて公開

授業の取組は、記録してブログで公開しているほか、定期的に論文にもまとめて、教育論文を募集している各種団体に応募している。腰を落着けて振り返ると、自分のねらいがより明確になり、改善点も見つかるからだ。